

魯迅の「明」について

——とくに初期文学活動を支える思想と一九一八年頃の「明」について

序

中井政喜

この小論の目的は、第一に魯迅の初期文学活動（日本留学中の文学活動）を支える思想が、一九一八年以後（この小論では一九二〇年頃まで）を対象とする。主として『新青年』誌上に掲載された雜感文評論の中に再び展開されていることを具体的に確認することである。第二に、例えば丸山昇氏は、
「当時の雜感を読んでみて気づくことは、そのテーマが、人類の進化と民族の滅亡、個性の解放など、ある意味では、東京留学時代すでに問題にしたことのヴァリエーションに過ぎないともいえるものだった。ことである。もちろんそこにはそれなりの深化も見られ、単純なくり返しではないのだが、レヘ「魯迅」一九六五」とされる。
そこで初期文学活動を支える思想が何故ヴァリエーションとして再び展開されるのか、を明らかにすることである。そのための初期文学活動の失敗や辛亥革命の挫折の過程から魯迅の受けた影響の質と言うべきものを明確にしなければな

らない。第三に、その影響下の一時期（一九一八年～一九二〇年）の思想の一面と、逆にさかのぼって初期文学活動を支える思想とに二、三の点からスポットを当てて比較することである。その一点として、弱者と強者について、二点として、中国改革への魯迅の想定した道筋について、三点として、人道主義についてである。その相違点を確認することによって、二つの時期の比較による特徴点を明らかにできれば、と思う。

I

初期文学活動を支える思想が再び一九一八年以後の文学活動に現われる点について

A 初期文学活動を支える思想について

魯迅の初期文学活動の代表的論文「中国地質略論」(一九〇三年一月日新江潮 八期)、「人々歴史」(一九〇七年一月日新江潮 八期)、「文化偏至論」(一九〇八年八月日新江潮 七号)、「摩羅詩力説」(一九〇八年二月日新江潮 二号)、「破惡声論」(一九〇八年二月日新江潮 八号)等にみられる魯迅の思想は、多くの人々の青年時代のそれと同様に非体系的で緊密に整合されていまいと見えよう。むしろ外からの新しい力ないしは思想に柔軟に対応し、しかも短期間の激しい形成過程に在る姿を示している、と思う。脈々と流れていつ中国へ漢民族へ再興を願う魯迅の心情を基底として、思想的な微妙な移り変りを石の論文から読みとることができよう。しかしながら粗雑であるのをまぬがれないが、後の比較のために今一括してここでは考えていくこと

にしたい。

「もしも誠に今日のために計画を立てるとすれば、必ずなさなければならぬのは、過去を考察し、将来を推測し、物質を攻撃して精神の光をさかんとし、個人を尊重して多数を排することである。人間の内容が輝き盛んとなれば国家も興起するのである。どうして枝葉にとらわれ、いたずらに経済軍事、国会立憲のことばかり言っているのか。」（「文化偏至論」）

傍点は引用者以下同じ

「善悪の判断は、大衆と同調してはならない。同調すれば不誠実な結果を招く。政治は大衆に同調してはならない。同調すれば立派な政治をもたげせない。只超人が出現してのみ、世の中は太平となる。もしも出現しえないうなら、その期待は英雄にある。」（「文化偏至論」）

「現在尊重され期待されていることは、大衆の喧噪たる議論に附和せず、独り自己の見解を抱いた士が、深遠な所まで洞察し、文明を評定し、惑いしれた者と善悪の判断を同じくせず、正しいと信ずる所へ赴き、世を挙げて誉められても調子に乗ることなく、世を挙げて非難されてもひるむことなく、従う者があれば、来るにまかせ、たとひ嘲罵をあひせて、世の中に孤立させても、やはりびくともしない。こういう士が存在することである。さすれば天の光でこの奥深い暗さを照らし、中国人の内なる輝きを發揮し、人がそれぞれ己を持つて、波風に漂わないことが期待しうるし、中国も自立するであろう。」（「破悪声論」）

「上述のこれらの人々は、その人格、言動、思想が民族の特殊性、環境の

違ひのために様々の状態で現われてはいるが、実は一つの宗派に統一される。剛健不屈、誠実さを抱いて真理を守らなかつた者は無い。大衆に媚びて、旧習におとなしく従ふことはほしなかつた。雌叫びを発して、その国の人々の新生を引き起こし、その国を世界に重からしめた。レヘ「摩羅詩力説」

右の文に代表されるような初期文学活動には

- (1) 人間の自我と独自性を認めることなく、圧殺し、すぐれた個人を大衆の力によって埋没させることに對して反對した個性主義
 - (2) 物質万能の否定と人間の精神性に対する尊重
 - (3) 民族の独立と圧制からの自由を高く掲げる人道主義的民族観と反奴隷精神
- という初期文学活動を支える特徴的思想がうかがわれる。さらに「人類は最初は微生物であり、蛆虫・虎豹・猿から今日に至つたもので、古い性質が潜在していて、時として再び現われる。その結果殺戮侵略を好んだり、土地・子女・宝玉・絹布を奪い取つて野蛮な心を満足させたりする。レヘ「破惡声論」

と云うように

(4) 進化論を人間の精神の発展過程と結び付けて、昆虫性禽獸性の精神から理想としての人間性に至る進化、或る場合には逆の退化の過程に人間の精神を位置づけており、進化論の特殊な適用の仕方をしてゐる。〔注〕

「その当時（一九〇七年前後を指す——馮雪華注）精神革命を信じて個性の解放を主張したのは、まったくロマン主義ですが、やはり進化論の思想

でもあります。反抗を主張し、民族革命を主張し、被圧迫民族の文学作品と弱小者に同情した反抗的文学作品の紹介を重要視したのも、やはり人に自然淘汰を警戒させ、生存競争を主張する考え方です。『魯迅の回想』(魯迅)馮雪峯、一九二九年魯迅の語った言葉として記されている)後に触れるように、精神改革こそが中国(漢民族)再興のための道筋と考えていたことからすれば当然なのだが、(5)民族の将来の命運も右の特殊な進化論と結び合っていた。中国人一人一人は現状に安んぜず旧習を打破して、精神的進化、向上の道をたどらなければならぬ。

「人がそれぞれ己を持つてば、社会の大いなる目覚めは近いのである。『破悪声論』」

「その第一に重要なことは人間を確立することである。人間が確立してはじめて、あらゆる事が行なわれる。『文化偏至論』」
その自覚を促す導き手は、衆より抜きんでてすぐれた個人と想定された。

B、一九一八年頃の「明」について

初期文学活動最後の所産『域外小説集』以後、魯迅の長い沈黙期間は続き、一九一八年『新青年』四巻八号に「狂人日記」を發表するまでは、作品らしい作品は無いと言つてよい。一九一八年から一九二二年頃までの小説、評論、雑誌の内容を大別してみると、明と暗という二つの流れに大別できるのではないか、と思う。明とは、初期文学活動の啓蒙性、積極性と方向を同じくするか

または中国の暗黒の状況に対して闘う勇氣を讀者に与える内容のものをして
おり、暗とは、典型的には「狂人日記」のように一見した場合暗い印象を与え
るものを指しておきたい。この明を代表して、旧社会の価値体系との「新青年
」の戦いや、新しい理想の方向とに対して、より強く同調しえたのが「隨感録
」。「我之熱烈觀」「我門現在怎样做父親」等の一連の雜感文、評論である。こ
の中にとりわけ、初期文学活動を支える思想の嫡子と思われるものが存在する
と思われる。

「私かう見れば、この『ほとんど国破れ族滅びんとする』中国を救おうと
するたう、それらの『孔聖人・張天子が山東から伝言する』方法は、まっ
たく病状に対応していない。それにはただこの怪しげな話の仇敵たる科学
のみがある！——上面でない真の科学が！——（『隨感録三三』一九一八）
これは初期文学活動で科学的教養（例えば進化論）に基づいた啓蒙を行な
うとし、「人え歴史」を論じた姿勢や、「多少の知識を獲得させ、遺伝の迷信
を打ち破り、思想を改良し、文明の補助をし」（『月界旅行』辨言）一九一
三）ようとした態度と一致する。

「中国人はこれまでいくらか自負を持っていた。——只惜しむべきは『個
人的自負』がなく、すべて『集団の』愛国の自負』だったことである。す
なわちこれが文化の面での競い合いに失敗して後、奮起し改良進歩を二度
とし得ない原因である。

『個人的自負』とは、すなわち独自性を持つことであり、凡庸な大衆に
対する宣戦なのである。精神病理学上の誇大妄想を除いては、この種の

自負を有する人は、大てい幾分かの天才性を持つている。——ノルドウヘ（Nordau）等の説に依れば、幾分かの狂気だと言ってもよい。彼らは、思想見識が凡庸な大衆より高く抜きんでている。と必ず自分で感じており、しかも凡庸な大衆に理解されない。そこで世を憤り俗を憎み、だんだんと厭世家、或いは国民の敵に度化する。しかし一切の新しい思想は、多く彼らから出て来、政治上宗教上道徳上の改革も、彼らから端を発している。だからこの「個人的自負」を多く持つ国民は本当に幸福である！ 実に幸運である！（「随感録三ハ——一九一八」）

凡庸な大衆ではなく、「個人的自負」を持ったすぐれた人間こそが、改革の原動力となるとする個性主義は、初期文学活動の一つの思想的嫡子と言える。

「憐れむべし」外国の事物は、いつたん中国に入ると、黒色の染料がめに、落ちたように色を失ってしまわぬものは無い。美術もその一つである。体格のなおまだ均整のとれていない裸体画を学んでは、猥褻画を挿き、明暗のなおはっきりしていない静物画を学んでは、看板を書くことができるだけである。上面が改新しても、思想がもとどおりであれば、結果はすなわちかくの如くである。（「随感録四三——一九一九」）

外国のすぐれた文化を中国がなお模倣できないのは、表面的技巧のみを学んで、それを内から支えている「思想」「人格」を学ばないからである。故にそれを中国に生かすえないでいる。つまり中国人の「思想」「人格」という精神的なものの改革がないかぎり、それを抜きにして遂行される技術的改革は上面のものに過ぎない。この論は、初期文学活動を支える思想でもあつた。

「何を司このようだと」言うのか。詰し出せば長くなる。簡潔に言えば、ただ純粹に獸性面の欲望の満足——権力・子女・玉帛——に過ぎない。しかしあつゆる大小の丈夫にあつては、最高の理想へ？とみなしたであらう。私は現在の人がたおこの理想に支配されているのを恐れる。L(「隨感」
録五九 聖式レ一九一九)

これは、歴史的にこれまで中国人の理想・生き方が獸性的な欲望の満足を求め、方向にのみ回っていたこと、そして現在もなおそれをまねがれてはいないのではないか、という危惧であり、攻撃であらう。とすればこれも昆虫性禽獸性の精神を排した初期文学活動の一つの思想的嫡子と言えらう。

「中国の現在の人々の心の中には、不平と憤まんの部分に余りにも多くなつてゐる。不平はそれでも改革の手引きであるが、しかしまず自己を改革し、それから社会を改革し世界を改革しなければならぬ。L(「隨感」
録六二 根根而死レ一九一九)

社会を改革する根本が、自己の改革にある、言い換えれば人間の精神、思想の改革にあるとするこの論は、「人間の確立」を第一義に置いた初期文学活動の思想的嫡子と言えらう。

以上のように初期文学活動を支える思想が約八年間弱の空白の後、再び非常な類似性をもつて表現されている、と考えられる。

さて初期文学活動を支える思想が、その活動自体の失敗にもかかわらず、一九一八年以後の時期に何故再び明の部分として類似性をもつて現われたか。その対照としての暗とはどのようなように考えられるものなのか。また以前には無かつ

た暗が出現した以上、二時期の思想には、その類似性の部分にもかかわらず、向りかの質的相違点、さらに類似性の中にさえ相違点が予想される。これを明らかにするために、初期文学活動と辛亥革命の魯迅にとって持った意味を次に考えてみたい。

II 初期文学活動の失敗と辛亥革命の挫折

A 初期文学活動の失敗

一九〇三年から一九〇九年までの初期文学活動の期間の途中で、一九〇四年入学した仙台医学専門学校を、魯迅が一九〇六年文学に志して中退していることはよく知られている。一九〇三年頃、弟周作人によれば、魯迅は梁啓超が日本で創刊した『新小説』を講読し、その影響は大きかった、という。梁啓超の小説についての考え方は、国民を一新するには、まずその国の小説の革新が必要である、と述べたように、社会における小説の役割、力量、効果を過大に評価しすぎていた、と思われる。しかし弘文学院在学当時の魯迅について、評者は次のように語る。

「私達はまた三つの関連する問題についていつも語っていた。(1)どのようであつてこそ理想的人間性であるか。(2)中国民族の中でもっとも欠けているのは何なのか。(3)その病根はどこにあるのか。」「(『我所認識的魯迅』)

「(2)に対しての追求では、私達の民族の最も欠けているものが誠実と愛で

ある。と当時私達は思った。L(同右)

「(3)の問題に対しては、当然歴史に追求の手を伸ばさねばならない。原因は多いのだが、二度異民族に奴隷とされたことが、最大最深の病根であると認められた。奴隷となった人間には誠実を説き愛を説きうるような余餘地があるだろうか……唯一の救済の方法は革命である。L(同右)

中国民族の民族性の欠陥を癒して具足させること、つまり精神的改革について常に語り合い、その手段は革命である、と考えたという。その魯迅にとつてみれば、梁啓超の人心を一新し国を一新する社会改革の強力な手段として文学を評価する考え方は、中国改革の喚起実践の方法として文学を位置づけるといふ意味で吸引力のあるものだったのであろう。

「私達が日本に留学していた時、つかみどころのないひとつの希望を持っていた。文芸は性情を移し変え、社会を作り変えることができるもの、と思っていたのだ。L(『域外小説集』序、一九二一)

このように文学をとらえた魯迅が、医学を捨て文学に走った契機に簡単に触れよう。ノート検閲事件は、日本が日清戦争に勝利をおさめて以来、清国人を見る大方の日本人の目が尊敬から輕蔑へと垂直に落下し始めていた状況を反映している。「中国は弱国であり、だから中国人は当然低能見であり、L(『藤野先生』、一九二六)魯迅も無論低能見である、という日本人の侮蔑を魯迅はつきつけられた。「しかし彼らが疑ったのは不思議ではない。L(同右)と魯迅はむしろ考えた。魯迅は、遅れた中国の中の先覚者としての意識(それは士大夫的な指導者としての自負心と重ね合わさったものであろう)から、非礼な

日本人学生を責めるよりは、低能とさげすまれる中国人の「劣等性」の方に耻辱を感じ、嫌悪した、と思われる。自身同じ中国人でありながら、さらに幻燈事件においては、この恥辱感と、そのはねかえりとしての目覚めぬ同胞中国人に対して持つ怒り（嫌悪）は、より明確に現われた。何故ならば日本人の注視のまとの中で幻燈に映し出された中国人の鈍麻した精神の姿を見つめなければならなかつたのであるから。屈辱的な中国人の鈍麻した精神を改革するため（へそれが中国改革の核心であつた）、魯迅が人の性情を移し変える力を持つものと考へた文学を選び依拠することを決意したのは、これらを契機としてであらう。

「日僕は文学を学ぼうと決心したんだ。中国のろくでなしと、くそろくでなしは、医学で治療できるものかね。」（「日我所認識的魯迅」）
こうして本格的に展開され始めた初期文学活動の性格はどのようなものであつたのか。第一に、その働きかけた対象が、中国の将来の政治経済等の分野の指導者となりうるだろう若い左日留学生知識人であつたこと。第二に、人間を精神的向上の道を進ませる上で、すぐれた個人とその文学活動に最高級の評価を与えていたこと。第三に、魯迅の思想の中に、物質万能の否定とともに、精神に対する偏重があつたこと。第四に、例えば

「善悪の判断は、大衆と同調してはならない。同調すれば不誠実な結果を招く。政治は大衆に同調してはならない。同調すれば立派な政治をもたらしえない。只超人が出現してのみ、世の中は太平となる。もしも出現しえな
いなら、その期待は英哲にある。」（「文化偏至論」）

としたように、魯迅は大衆を高みから見下したような見解、態度を持っていた、と思われること。^{〔注2〕}これは一面ニ―ケエ思想の影響であろうし、また士大夫階層的な指導者意識が、それを受容する思想的基盤の枠組としてあったこともよるのであろう。第五として、漢民族の自覚、「新生」を促す啓蒙運動とは満州民族清王朝の支配に対する反抗挑戦の性格を持たざるを得ないこと。以上のような点を考慮しつつ、この文学活動の最も特徴的な点を考えてみたい。魯迅は、政治経済を凌駕して、中国（漢民族）の再興にとって根本的な精神改革の役割を果す。例えば文化を發展させる超越的存在「明哲の士」、頑実な世俗に抗する「精神界の戦士」の存在を期待した。しかし精神的改革を達成した結実がどのようなものであり、達成後の現実面での見通しや計画がどのようなものであるかは考慮されることはなかった。^{〔注3〕}ここにこの時期の魯迅の思想の、旧社会に対するアンケテーゼ的性格という限界が現われている。しかしこの見通しの甘さ無さの故にこそ、逆にそれが前途遙々たる茫漠とした希望にすり代わっていたと言えるだろう。ただ初期文学活動に表われた強く、確信に充ちた楽観的な語調は、この希望に依ると言うよりは、魯迅の自身の力量・能力に対する盲目的過信、言い換えれば先覚者としての士大夫的指導者としての自覚、そして自己の思想の正しさに対する先覚者らしい確信に依っている、と思われる。この語調から、魯迅は、自身が中国における「明哲の士」であり、「精神界の戦士」であるとかえ自負していると読みとることが出来る。^{〔注4〕}

彼の文学活動が、バイロン、シェリーのようない「明哲の士」「精神界の戦士」の活動がそうであったように、多くの無自覚な中国の人々を目覚めさせ

政治活動のみならず社会の全分野に影響を實踐活動の形で呼び起こし、拡大していくものと、漠然と魯迅は夢想し期待していたのであるまいか。先覚者としての高みから、目覚めぬこれら知識人、大衆に向かつて魯迅が「臂を振つて一呼すれば、人々は必ずこれになびくだろう」(「摩羅詩力説」)と期待していたのではあるまいか。これが初期文学活動の大きな特徴点である、と思う。この魯迅を中心にして水紋のように広がる革命の形体の夢想においては、精神改革と社会改革との距離は半歩も無かつたであろう。

ところで雑誌「新生」(一九〇七年)は周屈の実学尊重の気風の中に立ち消えとなつたのだが、その内容を實質的に引きついだこれら初期文学活動の論文もまったく等閑に付された、と思われる。また同じ意図を持つた「域外小説集」(一九〇九年)も第一部、第二部とほとんど売れなかつた。「窪ち」こうして魯迅の日本における初期文学活動は、人々の無視の中に失敗に終わり、彼は一九〇九年に七年間の留学生生活を切り上げ、帰国して教職に就いた。帰国して以後、許寿裳あて書簡で魯迅は次のように記している。

「起孟は、日本において相変わらざる様子です。その手紙はいつも君のことを訊ねています。またJ. O. K. の小説を訳していて、ほぼ半分までになつてゐるそうです。僕はすつかりすさび果てて本を手に触れたこともありません。ただ植物採集は相変わりませんが。また類書をめぐり、古逸書数種を収集しました。これは学問を求めるものではなく、ただ酒と女に代えただけのことです。(一九一〇年一月一四日)」

「将来のことを思えばまったく心を痛めるばかりですが、僕はその思いを

自分で押さえ、心に深く食い入らせないようにとができます。日根賦五を読んでしまいでいかないうちに、いびきをたてています。L(一、九一一年三月一日)

これらの深く沈んだ調子は、初期文学活動の語調とはきわめて対照的である。これには帰国後の彼の境遇のよくないことを物語る一面もあると思われるがそれ以上に、青春の勇氣を持ち希望に満ち理想を高く掲げて訴えた初期文学活動の失敗かう生じた失望が、より大きな原因として存在するのではあるまいか。『並外れた神のような力があり、思い通りの成功があるものと、始めから自分で思い込みすぎる。幻想が余りに高く舞い上り、現実に墜落した時には、傷は格別に深く重いものとなる。』(『補白三』一九二五)

初期文学活動を今日振り返って見る時、これが専ら魯迅自身の精神への偏向的尊重の価値尺度に頼り、当時の知識人の現実的な価値尺度を計算外において成り立っていた以上、彼らの無視によって失敗に帰したのは当然であったかもしれない、と思う。魯迅は自己の理想と中国の現実との余りにも大きな懸け隔てを体験しなければならなかった。この失敗が魯迅にいかなるものをもたらせたのであろうか。

第一に、自己の非力さへの謙虚な反省であった。そして自己の力量に対する失望とその苦しみは大きかった、と思われる。

『私はおのずと限りない悲哀を抱いたけれども、決して憤懣ではなかつた。』
『というのもこの経験が私を反省させ、自己を見つめさせたからである。つまり私は臂を振って一呼すれば応える者雲の如く集まるという英雄では

なかつたのである。レ（「呐喊」自序） 一九二二

魯迅は、英雄、指導者でなかつた以上、指導者の高みから苦痛を嚙みしめて下りざるを得なかつた。

第二に、初期文学活動の対象とした知識人及び中国旧社会が、いかに目覚めさせることにおいて困難であるかを身に滲みて知り、中国（漢民族）再興の距離の遠さに痛く悲觀したであろう。これも魯迅にとつて苦しみであつた。

第三に、自己の非力さへの謙虚な反省とともに、この本石のように眩麻した国民性と旧社会に対して被害者意識が残つたであらう。それは、世俗の悪を認識し、かつ自己の思想・行動の正しさを認識する覚醒者が世に受け入れられない苦しみ、孤独感に似ている。この面から言えば、初期文学活動の失敗にもかかわらず、魯迅は、その原因を彼の思想内容自体に置かず、依然として初期文学活動の思想の正しさに対しては確信を動搖させなかつた、と思われる。すなわち、これが八年間の沈黙の後、初期文学活動の思想的嫡子といふべきものを一九一八年以後語るこゝろができた、一つの契機であらう。

また魯迅は、上述の文学運動の失敗の苦しみと、眩麻した旧社会に受け入れられなかつた先覚者としての被害者意識とを媒介にして、中国の陥つてゐる困難な状況、混乱を指導者、先覚者として上から見下すのではなく、むしろそこに苦しみ生活する人と同じ地盤に立つて、これらの苦しみに同情し、自己の苦しみとして共感できる基盤を持つたのである。旧社会とその犠牲者との関係において、この「苦しみ」を始めて理解したのである。魯迅のこの被害者意識は「バラ」の砂の集まつたような旧社会によつて、魯迅と同じように苦しみを

受ける人に無限の同情を与える一方において、これら苦しみを退屈のまぎらしの娯楽とするような鈍麻した傍觀者、群衆に対して、従来からする凡庸な大衆に対しての憎しみと相俟って、ますます強い憎悪を与えたものであろう。

B. 辛亥革命の挫折

一九一一年一月辛亥革命が起こり、一月杭州に続いて紹興が光復する。初期文学活動の失敗以後、魯迅は失意と孤独の中にあつたと考えたが、彼は辛亥革命をどのように迎え、辛亥革命は彼にどのような足跡を残したのだろうか。辛亥革命は、初期文学活動があくまで魯迅という中心から波及していく改革の形体であつたのとは対照的に、魯迅の外側の中心で發生し波及し、清朝を倒した。中国（漢民族）再興の願いは、中国人としての魯迅の変わらぬ根本的なものであり、また自己の非力さを身に滲みて知っていた彼は、他の中心から起こつた改革運動に熱烈な願望を託したと考えられる。

「今後天下の興亡は、民衆に責任があるのであつて、もし力を合わせて行なわず、中国の為に闘うのではなく、再び衰弱枯渴が過ぎし日と同じであるならば、勇武な士は一体誰を責めるであらうか。」（『朝花夕拾』出世辭）

革命が清朝打倒を実現した時、魯迅はこの民族革命の實質が發展的なもの（精神の向上への）としてありうるかどうか、危惧を抱いたのであろう。民衆に革命に対する不十分な理解、自覚を警告し、その喚起を一方で訴えながら、初期文学活動の時期以来の理想を実現する革命たらしめるために、積極的な援助者として魯迅は参加した、と思われる。

「民国元年について言えば、あの時は確かに大変明るかった。私も、当時南京の教育部において、中国の将来は大いに希望がある」と感じました。L
(「兩地書ハ」 一九二五)

民国元年の頃、辛亥革命の成功したと思われたまもない間、魯迅は中国の将来に明るい夢を持っていた。しかし辛亥革命は中国の古来の伝統的価値体系を突き崩す方向に進まず、中国人の精神も生活も旧態依然たるままであつて、極論すれば、只工層の指導者の首がすげ替えられたにすぎなかつた。その後まもなく権力を目的とし、改革の目的を持たない実力者袁世凱が政權を握りし、紹興でも反革命派が権力を取り返した。この状況のもとでは、魯迅が辛亥革命の成功に託したであろう旧中国に對してのアンケテービ的国家像、人間像である。独立と自由の精神、個性主義、人道的な精神等、これらはもはや望むべくもないこととなつた。

「最初の革命は排満で、やりとげるのが容易なことでした。その次の改革は国民に自分の悪い根性を改革するよう求めることと、そこで国民は聞き入れなくなつたのです。だからこの後最も大切なのは、国民性を改革することです。さもなければ、専制であろうと、共和であろうと、何であろうとも、看板は変わったけれども、品物は元の通りではまゐつたためです。L (「兩地書ハ」 一九二五)

この間へこの論文が取り扱つてゐる初期文学活動から一九二〇年頃までを指す)の魯迅の認識は、伝統的国民性と旧社会の悪を規定する国際情勢や中国の社会経済の關係にまで及んでいなかつた、と思ふ。従つて魯迅の攻撃の矛先は

帝國主義の圧迫や封建的社会經濟制度の支配層に対してよりは、この体制のもとに浮かび出てくる。工部構造としての硬直した旧社会の悪の姿態（例えば礼教、伝統的国民性の悪）に対してより強く向けられたのである。むしろ此處こそ根本的問題であると並立して向けられた、と思う。

魯迅が初期文学活動の失敗の体験のうちに痛く味わった、木石のように鈍麻した伝統的国民性に対しての不信は、今また辛亥革命の挫折の根本的原因を自覚めぬ国民性に課してしまうことによつて、さらに決定的不信となつて根を広げた、と思われる。「注6」後一九一七年陳独秀は、「文学革命論」の一節で、中国の暗黒が辛亥革命を経たにもかかわらず、いささかも減少していかないことを取り上げた。その大きな原因を「精神界に盤踞した根深い倫理、道徳、文学、芸術」などが改革されなかつたためとしている。それは中国人の精神的改革を中国改革の核心としたに他ならないのであり、魯迅の認識と一致するであろう。

しかしながら中国改革の根本的障害が伝統的国民性の悪だ、というこのような内面的精神的な所に魯迅が原因を置いていたとするのは妥当性のあることなのだろうか。

「革命はとうとう起こつた。一群のつまらぬ見栄をはつていた紳士達は、たちどころに喪家の犬のようにビク／＼し、弁髪を頭の上に巻きつけた。革命党も新しい気風——紳士達が先には徹底的に深く憎悪した新しい気風——を打ち出すと、大変可憐な文明心であつた。可憐なともに維れ新たななりとなつたのであるから、我々は水に落ちた犬を打たないものであつて、彼らの這いあがつてくるのにまかせればよい、というのであつた。そこで彼

らは這いあがってきた。民国の二年の後半まで雌伏し、第二次革命の時突
然出てきて袁世凱を助けつゝ、多くの革命家を噛み殺してしまつた。中国は
また一日一日と暗黒の中に沈んで行き、すつと今日に至つてゐる。遺老は
言うまでもなく、遺少すらなお非常に多い。先の烈士達の好意、鬼畜に対
する慈悲が彼らを繁殖させたが故に、この後の覚醒した青年は暗黒に反抗
するためにさらに／＼多くの氣力と生命とを費やさなければならぬので
ある。レ（「論曰 費厄潑頼 曰 應該緩行」 一九二五）

この辛亥革命前後の血の教訓は、中国改革を阻もうとする旧守派、紳士達に
対する非妥協的な心情と、煮えたぎる憎しみを魯迅に与え続けた一たとい或る
時期にはそれがうづ屈し、或いは忘却と麻痺のうちに置かれようとした。とし
ても、烈士達の苦心慘澹のすえの建国を再び暗黒の中に引きすえた敵の姿は
魯迅にとって具體的存存であり、明確であつた。しかし中国改革の敵としての
旧守派、紳士達に対する憎しみは厳しいとはいへ、中国改革にとって最大の根
本的障害は、これらの旧守派、紳士達でさえそのひとつの現われであり、中国
民族を包みこんでゐる伝統的国民性の悪である、と魯迅は考えていたのではな
からうか。

「現在議員を罵る人が常にあつて、彼らが賄賂を取り、すぐれた節操がな
く、権勢に迎合し頼り、自己本位で自分の利益のみを求めると言う。し
かし大多數の国民はまさにこのようなものではないか。この種の議員は実
に本当の国民の代表である。レ（「通訊」 一九二五）
この論理からすれば、旧守派の政客紳士達は、まさに中国人全体の伝統的国

民性の悪を反映した結実の一種に他ならなかつたのではあるまいか（しかし彼らを免罪した訳では決してない）。

辛亥革命の挫折に対しての失望は、革命を起こし得た外在的な力に対する失望を意味したであろう。自己の力による改革の試みは既に失敗しており、今また外在的な力による試みも中国人自身の伝統的国民性の悪によって挫折したと考へた魯迅にとって、中国人をよく指導し、その性情を移す力を一併具體的にどこに求めたらよかつたのだろうか。伝統的国民性の悪の治癒手段として魯迅によつてこれまで考へられたのは、やはり広い意味で文学と教育しかなかつたであらう。しかし文学という手段は、初期文学活動において自己の非力さを思ひ知つた魯迅には無いに等しいものであつたらう。また教育事業は革命の挫折の進行とともに時の政府に期待できるものではなくなつていた。

「臨時教育會議がついに芸術教育を削つたと聞く。この脈、尤どもは、憐れむべし憐れむべし。」（一日記 一九一二年七月一二日）

こうして改革の道を閉ざされた魯迅には絶望しか残されなかつた。と思われ、
。「注」 魯迅は一九一〇年から始められていた古書の蒐録編纂を辛亥革命の後から再開し、日謝承後漢書、日愁康集、日蒐録し照合し編纂し、一九一四年からは仏典を読みふけり、その上に一九一五年からは拓本の収集を始めており、この類の仕事は右に挙げたものに留まらうない。

「私自身の寂寞はとりのぞかない訳にはいかないものであつた。というのもこれは私にとつてあまりに苦しすぎたから。私はそこで様々の方法を使つて、自分の魂に麻醉をかけた。私を国民の中に沈みこませ、私を古代に

歸らせたのである。L(「呻吟」自序一九二二)

「長年、私はこの部屋に住んで古碑を写した。客については訪れる人はめつたに無く、古碑のうちでも何らかの問題や主義に出会うことはありえなかつた。そして私の生命の方は果して思つた通りひそかに消え去つてしまふ。これがわずかに私の唯一の願望であつた。L(同右)

こうして魯迅は一九一八年「狂人日記」を發表するまで、ほぼ沈黙に終始した。

「まさに苦しんでいるその時には、苦しみを表現することはできない。仏説の極苦地獄の亡靈は、かえつて叫び声を決してあげない。L(「叩壁」文后一九二五)

絶望に陥つた魯迅は、「魂に麻酔をかけれる手段によつてこの苦しみから救われようとし、むしろ徐々に死滅することを望みとしていたかのである。むしろ目的的に絶望の中に沈みこむことこそが、魯迅にとつては救いであつたかのである。一九一〇年から古典の寫録編纂が始まつていることからすれば、只単にこれが袁世凱の追求の日々を逃れる手段であつた、と限定的には言えないであろう。初期文学活動の失敗、辛亥革命挫折の経過の中で、魯迅の絶望の深刻化と平行して現われたのが、植物採集への熱中であり、古典の寫録編纂であり、仏典への傾斜、拓本の収集等であつた。その中には、例えは仏典の耽読のように現状解釈の糸口を求め、氣持が含まれていたものもあつたかもしれない。しかしながらそれらの行為は基本的には、自己の非力さへの失望や、中国(民族)改革の断念のための鎮魂の行為ではなかつたか、と思ふ。〔注〕

III

「明」としての再出現の理由と類似性の中の相違について

一九一八年魯迅が長く苦しい沈黙を破つて「狂人日記」を發表したことは、中国旧社会という「鉄の部屋」へ「呐喊」自序」を打ち破ることの不可能性の彼なりの「確信」へ「同右」を抱いていた魯迅にとつて、必ずしも絶望から脱却した、むしろは脱却しようとしたことを意味するのではなかつた、と思つて。例えは一年後の一九一九年の五四運動は近代中国の反帝反封建の出発点と認められ、今日画期として高い評価を与えられている。しかし魯迅が五四運動の一面の姿、とりわけ旧社会の中国人の運動の中に現われる精神に対して、いかに鋭敏な神経をもつて目を注いでいたか、を次にあげよう。

「私はまだ覚えてゐる、第一次五四の後、年工警察達は大変遠慮して鉄の台じりだけで、あの身に寸鉄もない教員と学生とを乱打し、その勇猛ぶりはまづたく一隊の鉄騎が苗田の上を馳駆するかのようであつた。学生達は驚き斗んで逃げかくれ、ちやうど虎狼に出会つた羊の群のようであつた。しかし学生達が大群となつて彼らの敵を襲撃するときには、子供に出会つて、突き飛ばし、もんどり打つほど転ばせたではないか。学校ではやはり敵の子供にいまいました悪口を言い、子供が逃げて家へ帰らなくてはならないようにさせたのではないか。これは古代の暴君の族滅の考えとどんな違いがあるというのか。」「忽然想到」七レ一九二五」

五四運動を推進した人々の中にさえ存在する、弱い者には凶暴で強い者には従順な伝統的国民性の悪の一つ奴隸精神を魯迅は見逃さなかつた。その結果、

五四運動に對してのこの時の彼の評價は極めて嚴しいものとなっている。

「近年すつと国内は不穩で、その影響は學界に及び、混亂のうち既に一年となり、世間の旧守派は、この事を混亂の源と思ひ、維新派はこれを口を極めて譽め上げます。全国の學生は禍の兆しと言われ、或いは志士と持ち上げられています。しかし私から見れば、中国に實際の所何の影響もありません。只一時の現象にしか過ぎません。志士と言ふのはもとより譽めすぎです。禍の兆しと言ふのはまったく不当な扱ひです。」（宋崇義、あて書簡 一九二〇年五月四日）

傳統的國民性の悪を改革する方向を運動の發動する契機の中に持ち得ていず、運動の中にその悪を内包し、それをいかに発出する五四運動に對して、この根本的と思われた問題が抜け落ちていた以上、「中国に實際の所何の影響もない」という嚴しい見方しか魯迅はとれなかつた。傳統的國民性の悪と悪をぶつけ合う中に、これが改革され、「鉄の部屋」を打破つて、中国が新しい希望の道に進み得るのだ、とは考えられなかつたのであらうと思ふ。このように初期文學活動の失敗、辛亥革命^の挫折以來、魯迅に根付いて来た基礎的な絶望感は、五四運動によつて動搖していない。「注9」さて「狂人日記」において、狂人は「人を食う」也を否定し、自己反省へ進んで「人を食つた」可能性のある自己を否定する。しかしこの否定が、魯迅のこれまでの沈黙に對する反省や、今後絶望を脱却して新たに出立する意志と結びつく面は、むしろ弱いと思われ

る。
「易牙が彼の息子を蒸して、梁紂に食べさせたのは、なおすつと昔の事だ

す。一本註が、盤古の天地開闢以来、ずっと易牙の息子まで食べ続け、易牙の息子がうすつと徐錫杯まで食べ続け、徐錫杯からまたずっと狼子村の捕えた人間まで食べ続けたことを知っていました。しかし「狂人日記」

このような中国における今日に至るまで連綿と続く食人の歴史を、「狂人日記」は暴露し、告発する。食人は、中国の様々な諸層の暗黒面の典型として読みとれるであろう。このような中国旧社会をどのように改革するのか。

「自身は人を食いたいと思うが、また他人に食われてしまうのを恐れている。みんな極度に疑ぐり深い目で、顔と顔を見合わせている。……この考えを捨て去つて、安心して仕事をし歩き御飯を食べ眠れば、どれほど気持ちの安らぐことだろうか。これはただの教居に過ぎず、分岐点に過ぎない。」（同右）

各個人が他人を食おうという考えを捨てさえすれば、つまりこの「教居」を一步越えさえすれば、「分岐点」を正しく一步進みさえすれば、食人の社会から人間の社会へと進むことができる、と狂人は訴える。しかし魯迅は狂人に中国改革の展望をこのように語らせてはいるのだが、「狂人日記」の読後、この作品を圧倒的に包みこんでいるのは、むしろ魯迅の真つ暗な絶望感である。と印象づけられるのである。魯迅の「旧社会の病根を暴露して、心に向けるように人々を促し、方法を講じて治療する希望」(『自選集』自序、一九三二) 或いは意図は、この作品において成功してはいる。「注」しかし改革を受けつけない旧社会に絶望し(特に伝統的国民性の悪に絶望し)ていた魯迅にとって、

旧社会の病根を暴露するとは、彼の絶望そのもの或いはその原因を表白するという面を持たざるを得ない。結果としてこうした作品には彼の真つ暗な絶望感が表出され、浸透しない訳にはいかなかつたのである。『狂人日記』は魯迅の絶望の尖鋭化された表現であり、そこでは魯迅が絶望を引きずつたまま、絶望の外側にある子供を救えと叫んでいる面の方がむしろ強い、と思う。

魯迅はこのような真つ暗な絶望感（暗）を抱きながら、一九一八年何故文学活動に参加し得たのだろうか。

第一に、魯迅は中国（民族）の滅亡という危機感から迫られた中国改革の願望を捨て切れなかつたこと、つまり真つ暗な絶望の中で自己及び自己の願望を麻痺し切れなかつたことを根本的な理由としてあげなければならぬ。

「しかし幾人かの者が起きた以上、この鉄の部屋を毀れず希望が絶対無
い。君は言えまい。」

そうだが、私は私なりの確信をもとより持っている。しかし希望を語るの
であれば、それは抹殺できないものだ。『呐喊』自序
第二に、かつて魯迅が初期文学活動において、全く無視された際の寂寞の苦
しみを、当時「文学革命」を推進していた人々に味わせたくなかつたことをあ
げたい。

「直接的に『文学革命』に対しての熱情ではなかつた以上、何故筆を取り
上げたか。想い起こせば、大半はむしろ熱情をたぎらせた人々に対しての
共感のためであつた。」

私はこれらの戦士は寂寞のうらにあるけれども、考えは間違っていない。

天声をあげて景氣づけをしようと思つた。まず、このためであつた。勿論この中にはまた、旧社会の病根を暴露して、心を向けるように人々に促し、方法を講じて治療をする希望を雜えていたのに違ひはない。しかしこの希望を達成するためには、必ずや前駆者と同一の歩調をとらなければならなかつた。そこで暗黒を少し消除し、少し喜びの様子を装い、作品に若干の明るい色を比較的現出させた。それが後で集めた『呐喊』であり、全部で十四篇あつた。『鲁迅選集』目録一―一九三二―

さらには『文学革命』を推進している人々の『考へは間違つていたい』と魯迅は判断していたことが分る。では何故、初期文学活動の失敗にもかかわらず、初期文学活動を支える思想の痛手と言うべきもの、『明』が一九一八年以後の文学活動に存在するのであろうか。しかもその『明』と『暗』とが平行し、かつ浸透してここに現われたのは何故であらうか。

前章で触れた様に、初期文学活動の失敗は魯迅の思想の先覚者的本質を損つたものではなく、魯迅の絶望は先覚者的絶望という一面があつたことを忘れてはならないだらう。つまり魯迅は心の基底として眞つ暗な絶望を抱きながらも、先覚者として中国人に語りかけた思想を持ち且つそれは中国改革に重要な思想だと自覚していたはずである。これが再び現われた『明』の部分である。この場合、最初から魯迅自身が積極的に『新青年』に飛びこんだのではなく、外から働きかける力としての『新青年』への勧誘が魯迅の執筆にあたっては大きな推進力の役割を果している、と思われる。このため魯迅には、自己の絶望

を克服しようとする意志（明への意志）と、その意志すらも砕いてしまふ絶望の力（暗し）との葛藤と相剋の過程を経て、始めて沈黙を破るといふ契機がこの場合乏しかつた、と言える。故にここに明と暗とが平行し、かつ浸透して現われた、と思う。ところで魯迅自身が、この明と暗とが平行し、かつ浸透して現われる状況に対して抵抗感を抱いていない、かのように思われる。その理由は何であらうか

「まず目覚めた人から、各々自分の子供を解放するよりほかない、自ら困難の重荷を背負い、暗黒の水門の扉を肩に支えきつて、波らをかきつけた光明の場所に救つのである。レ（「我儕現在怎样做父親」一九一九）

伝統的国民性の悪に染めていない、汚れない子供達に中国の将来の望みをかけ、四十年の暗黒に暮を閉じるために我々が犠牲とならなければならぬ、という進化論の影響に基づいた思想を一九一八年以後のこの時期魯迅は持つていた、と思われる。中国の将来のための礎と自己犠牲的にならうという決意のある人にとつては、自己の絶望（暗し）こそが、この決意（自己犠牲による明の展望）の支えとなつていたかもしれない、と思う。言わばそれは捨身の明であつた。以上のことから結論的に言えば、明と暗とが互いに排除し合うことなく平行し、かつ浸透し得たこの時期においては、暗の部分に初期文学活動にはなかつた魯迅の主流であり、深さであるとするれば、明の部分は「新青年」の革命的前駆者の要望と初期文学活動以来魯迅の起代消長の中で捨てきれなかつた中国改革の願望によつた先覚者的思想、いわば支流というべき思想であつた、と考へる。

では一九一八年以後のこの時期を支える思想と初期文学活動を支える思想の質的相異点はどこにあると考えるべきなのか。

第一に「強者と弱者の」とらえ方をめぐっての相異点を述べたい。初期文学活動の時期において魯迅は弱小民族の一員としての立場に立ち、従って進化論を涵養される民族の側から考えていたことが、識者によつて指摘された。「注リ」この点に関連する訳であるが、初期文学活動における魯迅の強者と弱者のとりえ方は「王迫民族（例えば滿州民族・ロシア民族）と被压迫民族（例えば漢民族・ポーランド民族）」という民族のレベルでのものであった。と思ふ。それは階級制の意味での強者（王迫者）と弱者（被压迫者）のレベルでのとりえ方ではなかつた。一九一八年以後のこの時期においては、この関係はむしろ半封建的旧社会という階級社会内の関係としての压迫者と被压迫者（感性的どうえ方の枠内ではあるが）というとりえ方に移り、かつ深まっている、と思われる。そこには二点の事情を考慮しなければならぬ。

ひとつには「ロシア文学との本格的接触による」と思ふ。

「その時ロシア文学は私達の指導者として友人であることを知つた。なぜならばそこから被压迫者の善良な魂、苦しみ、もがきを見つけたからである。さらに四〇年代の作品とともに希望を燃やし、六〇年代の作品とともに悲哀を感じとつた。私達はその当時の大ロシア帝国もまさに中国を侵略したことを知らなかつただろうか。しかし文学からはひとつの大きなこと、世界には二種類の人、压迫者と被压迫者があることを理解した。

今からみてみると、これは誰もが分つており、言うまでもないことだ。

しかしその当時には大発見であり、古人の火を発見したことが暗夜を照らし、ものを煮ることを可能にしたことにまさに匹敵した。レ（「祝中俄文字之交」一九三二）

初期文学活動中一九〇九年既に「域外小説集」でアンドレイエフの短編二篇とガルシンの「四日」を翻訳し、またトルストイの人道主義的無抵抗主義的考え方についての言及（「破悪声論」）もあるのだが、そこには「被压迫者の善良な魂・苦しみ」もがきを見つけた「形跡」或いは「世界には二種類の人、压迫者と被压迫者があることを理解した「形跡は見られない」と思う。「注12」上のような認識（それは社会科学的であるよりは、感性的なものであつた）に到達できたのは、例えば「故郷」（「呐喊」一九二一）、「一件小事」（「呐喊」一九二〇）、「無題」（「熱風」一九二二）を書き、アルツェバシエフの「幸福」〔注13〕、アンドレイエフの「黯澹的烟霧里」を翻訳し、「中国文学界でも一九二一年『俄国文学研究』」（『小説月報』第一二巻の増刊）が発行された一九一八年以後のこの時期ではないか、と思う。その「一件小事」や「無題」はともに下層の中国人の善良な魂に打たれ、彼らの中にこそ伝統的国民性の悪ではなく、むしろ真の人間らしさ善良な魂を見つけたことを插いている。「故郷」では「子だくさん・飢饉・苛税・兵隊・賊・役人・郷紳」すべてが閉上を苦しめ、木偶坊のようにした「ことを述べ、虐げられた農民の苦しみ」もがきを插き出している。これらは、ロシア文学から啓発された「被压迫者の善良な魂・苦しみ、もがき」の中国での発見であつたに違いない。

さらに二点めとして、「被圧迫者の善良な魂、苦しみ、もがきを見つけた」得る条件として、初期文学活動の失敗以後魯迅が中国人一般を先覚者指導者の高みから見下すのをやめ、むしろ中国民衆と同じ平面に立ち、かつ中国の被圧迫者の苦しみを目を開いて、それを旧社会の犠牲者の苦しみとして見ることで、きた時期でなければならぬ、と考える。一九一八年以後のこの時期はまさしくその時期に含まれる。つまりこの時期においては、①初期文学活動の失敗によって自己の力量の非力さを知った苦しみの体験、②旧社会から感性的に受けた「世界には二種類の人、圧迫者と被圧迫者がある」という考え、③辛亥革命前新興民族の支配下で味わった被圧迫民族の悲哀と怒りの体験、「雜憶」(一九二五)、「これらを媒介にして、旧社会の中で苦しむ人々への共感を深め、圧迫者へ苦しめる者」と被圧迫者へ苦しめられる者」に対しての認識を深めていった、と思われる。魯迅が暗の部分すなわち「孔乙己」「阿Q正伝」「棄てられた」と題する「日光」等の作品で、旧社会で苦しめられてきた女性、失敗者、被害者を中心にこめて描き出したのは、彼らに共感と憐憫を起こさずにはいられない被圧迫者の内面的下地があったのである。この見方は、初期文学活動の魯迅が先覚者と目覚めぬ者、圧迫民族と被圧迫民族という観点に立っていたことか

らすれば、画期的成長、相契ではなかつたか。「注15」

第二に、魯迅の想定した中国(民族)を改革する筋道、手法について検討を加えたい。一九一八年以後のこの時期魯迅が考え得た唯一の方法は、やはり初期文学活動を受継いできた進化論、個性主義に基づいたものである。

「まず自己を改造してしまつて、それから社会を改造し、世界を改造しなければならぬ。」(『隨感録六二 根根而死』一九一九)

自己を改造するという個人の改革から社会の改革へと進行する形体という点では、初期文学活動と同じなのであるが、その進行のあり方が全く様相を一変した。それは初期文学活動には見られなかつた自己犠牲的姿勢と、進化論とが「つらり結びついているものである。目覚めた個人、目覚めた魯迅達一世代を「まずで古い帳簿を清算し、一方で新しい道を切り拓かなければならぬ。」(『我々現在怎样做父親』一九一九)位置にすえる、すなわち目覚めた自分達の世代を新しい道への橋渡しとして犠牲にすることによつて、伝統的国民性の悪である畜獸性の精神等のはびこつた四十年の古い帳簿に締めくへりをつけ、汚れない子供達をこの旧社会から解放し、独立と自由の精神、個性主義、人道主義つまり人間らしい精神の実現した、人間が人間らしく生きられる世界に置いてやるのである。

「中国のすべての旧物は、どんなものであろうと必ず破壊する必要がある

。」「(『宋崇義あて書簡』一九二〇年五月四日)

「最初文学革命者の要求は人間の解放であり、彼らは古い既定の法を一掃しさえすれば、残るのは従来の人間、すばらしい社会であると考へた。

」(『草鞋脚』小引』一九三〇)

こうして何もかも否定されるべき古い中国、古い既定の法は、目覚めた魯迅達一世代の犠牲によつて、汚れない子供達の世代になると完全に一掃され、伝統的国民性の悪はきれいさっぱりと清算されて、人間の解放、新中国の誕生と

なるはずであった。これは夢想的であろう。しかも魯迅自身が到達し得ていた「圧迫者と被圧迫者」の存在という現在の問題を、この進化論的解決の仕方の中に解消していた」と思われる。

上記のことを、先づの初期文学活動において想定された改革の筋道、方法の形、つまり例えはバイロンのような「精神界の戦士」が、人々を覚醒させ奮い起こして改革を推進するという形体へここでは魯迅自身も「明哲の士」である」と幻想された一と比較してみれば、その相違は明らかだと思う。しかしながら一九一八年以後のこの時期の自覚めたる者の自己犠牲による改革の推進とは、すべからぬ個性こそが改革を指導し推進するという個性主義の、消極的ないわば裏返しの表現に他ならないのではないだろうか。初期文学活動において自己の非力さを痛切に思い知らされた体験によって、魯迅の個性主義は、中国改革に対する振り主体的生き方そのものに関わって現われる時、屈折せざるを得なかつた、と思う。故に右の相違は、個性主義が一九一八年以後のこの時期の状況において屈折した形で現われた所に、その特徴的点がある、と言えよう。

第三に、初期文学活動を支える思想と明の部分に表わされた思想との類似性の中に相違点が存在するのかがどうか、を検討したい。ここでは、初期文学活動における魯迅の人道主義とは一体どのようなものであり、一九一八年以後の数年間の時期のそれとどのような相違が存在するのかが、を取り上げたい。

「上は力づくで天帝に反抗し、下は力づくで人類を撃刺する。行動の矛盾はこれよりひどいものはない。しかしながらその人類を撃刺するのは、反抗するためなのである。もしも人類が一緒に反抗するのなら、またどうし

てこれを撃肘しようか。バイロンもまたそうである。自らは必ず人の前に
おり、人が大衆の後にあるのを怒った。(中略)バイロンはナポレオンの
世界破壊を喜び、またワシントンの自由のための闘争を受した。海賊の横
行ぶりに心を寄せ、またギリシヤの独立のためにひとり援助した。圧制と
反抗とを、ひとりで兼ね備えていたのである。しかしながら自由はここに
あり、人道もここにあるのだ。(「摩羅詩力説」)

民衆とは、先覚者の心身によって自覚に到達する素地を持つものとされたが
現状の無知意味さに対しては、彼らを啓蒙しつゝも撃肘しなければならぬ
のとされている。民衆を撃肘しつゝ上に対して反抗する所に、もしも自由と人
道があるとすれば、それはバイロンのようなすぐれた個性、指導者、英雄にこ
つただけの「目目」であり、「人道」に過ぎないのでないか。

「もしも奴隷がその前に立てば、必ず真心から悲しみながら、憎悪をもつ
て見た。真心から悲しんだのはその不幸を悲しんだかうであり、憎悪をも
つて見たのは、その闘かわないことかうであった。」(同右)

このようなバイロンの見方、つまり個人を歴史的社會に置かれた、社會の豫
々の關係の具體的現われとしての個人ではなく、それから切り離された個人自
体として見る見方に立つ以上、つまり民衆が束縛され制約されている社會的歴
史的諸条件を抜きにして、例えば奴隷であることをも個人の問題、意志の問題
に環えしてしまふ以上、バイロンの「人道」は少くとも民衆の立場からの人道
とは程遠いものではあるまいか。

「美しい諷によつてあらゆる無目覚な者を悟らせ、人類繁栄の大道理と人

生の価値の在り所とを教えて、同情の精神を高め向上と渴仰の思想を広め、人々が大いなる希望を抱いて奮闘前進し、人々を時の永劫さと同じからしめようとした。世はこれを悪魔と呼び、シェリーは遂に孤立した。(一
同右)

これは、先覚者が指導者としてあらゆる無自覚な者達に独立・自由・人道等を啓蒙しようとしたことを意味するに他ならないであろう。こうした場合の人道とは先覚者のみが体得し、彼らから与えられるものとしての、民衆にとっては各個人の認識と意志の問題として教えられる人道ではなだろうか。魯迅の「人道」も、この種の指導者的立場からの人道ではなかつただろうか。

「もしも自国の樹立が既に堅固であり、余力があるならば、ポーランドの武二、バイムがハンガリアを助け、イギリスの詩人バイロンがギリシアを助けたように、自由のために力を奮い、王制を覆し、世界からこれを除き去らねばならない。およそ危機の国があれば、皆ともに助け合つて、まず友国を立たせ、次にその他へ押し及ぼして、現代の世界に自由を充ち足らさせ、虎視眈眈たる白色人種からその臣僕を矢寄せなければならぬ。(一「破悪声論」)

これは、当時の社会世界において、自由や人道がどのような具体的に適用されるべきなのか、についての言及ととれる。この言及が個人的人間間のレベルでの自由・人道を飛び越え、階級的な意味での被圧迫者の解放を扱きにした。民族或いは国家のレベルでの自由・人道の主張であることに注意したい(一勿論それは不可分離であるが、重点がどちらにあるかと言えはである。一これは指

道義的立場に立った人道の通用の仕方であると思われ、人道についての魯迅の考え方の傾向、特徴を側面から物語っているのではないか。これが被圧迫者の立場から人道のとりえることのできなかつた初期文学活動の人道主義の限界であらう。しかしながら魯迅は民衆に対する信頼を「心が純白な、素朴な民」へ「破悪声論」等の形で語っていたのではないか。そこに一方的に指導者的立場というものを考えることができるのだろうか。

「中国とはどのような国なのだろうか。民は農耕を樂しみ、故郷を去ることを輕蔑し、上に在る者が功をたてることを好めば、在野の者はこれを恨んだ。およそ自ら誇る所は、文明の華美盛大なこと、暴力によることなく四夷に抜き出し、平和を熱愛することの世界にまれであったことである。ただ安樂さが長期にわたり、防衛の力がしだいにゆるんだ所へ、虎狼が突然やってきたため、民は塗炭の苦しみに陥った。しかしこれは吾が民の罪ではないのである。流血を憎み、殺人を憎み、別離を憎み、労働に樂しんで従事する。このようであるのが中国人の性格であった。」（「破悪声論」）

このような言及に見られるひとつの特徴点は「民は塗炭の苦しみに陥った」現在の危機に際し、民に改革の主体を求め民とともにどのようなようにここから脱却するのかが主とした問題意識としてあるのではなく、平和を愛する民にどのような指導を与えてここから脱却するのかが主とした問題意識としてある。と思われることである。魯迅は「心が純白な、素朴な民」に言及した時、民を最初から受動的立場に置いて、「志士」の誤った指導の仕方を排しているのであらう。

て、中国改革の道筋において民を視野の中に入れつゝも、受動的存在としてしか位置づけられていない、と思う。「窪」また右の引用文からうかがわれる民衆観は、樂天的であり、書物的でさえある、と思う。さらにそこで王朝と民との支配抑圧關係が不明確なまゝの一方、現在の窮状を「虎狼が穴然やつてきたため」といふ外国勢力の圧迫に短絡的に理由を求めているのは、魯迅が中国の指導者、先覚者、士大夫的意識の立場に立つことに同じ根がある問題ではないだろうか。

一九一八年以後のこの時期においては、魯迅は「我之節烈觀」「我儕現在怎樣做父親」等を書き、旧社会の中で被圧迫者犠牲者として虐待を受け、悲慘な境遇に在らしめられた女性の立場を明確にし、また親の絶對的権力の下にあつた幼き者の權利を擁護し、それによつて旧社会の批判を行なつた。

「中国の社会は、道徳がすばらしい」と言うけれども、實際は愛し合い助け合う心を余りにも欠きすぎている。可憐、可烈、この類の道徳であれど、どちらも他人は少しも責任を負わずに、幼い者弱い者をいぢすにこらしめる方法である。「我儕現在怎樣做父親」

これは魯迅が弱者、被圧迫者の立場に立つた人道主義を主張してきたことを意味するに他ならず、初期文学活動の人道主義の、質的に深化し拡大した現われと思う。この意味で、やはり質的相違点が存在するであろう。

IV

まとめ

初期文学活動の論文は、魯迅が士大夫的指導者的先覚者的である立場、言い換えれば中国人一般を高めから見下したような立場に立った性格を持つものである。この文学活動の破綻は、魯迅の指導者的立場の崩壊であった。魯迅の個性主義は屈折した。これが第一の特徴である。またこの破綻や辛亥革命の挫折によって味わった苦しみの体験を媒介として、指導者的立場から下り民衆と同じ平面に立って、旧社会の苦しむ人犠牲者に、すなわち今までは観念的にしか彼らの苦しみを理解できず、受動的な存在としてしか視野にだかつたこれらの人々に始めて目を見開いた。このような条件の中で、ロシア文学の影響は魯迅にとって大きなものとなった。一九一八年以後のこの時期に始めて、压迫民族と被压迫民族という理解に留まらず、「压迫者と被压迫者の理解の上に立った文学活動を展開してきたのである。この点が核心的特徴なのである。ただしこの時期の魯迅の対象への近づきすぎは感性的と言えらるのであつて、被压迫者とは苦しめられる者に他ならなかつた、と思ふ。はつて旧社会の弱者犠牲者には厚い同情と共感を寄せた。しかしその一方で、階級としては同じ下層の民衆でありながら、彼らより一層弱い弱者を苦しめる存在としての精神の疎早した民衆を一方的に強く否定した。さうには弱者を苦しめ旧社会から利益を引き出す支配者層（「阿Q正伝」の地主など）を強く憎悪したのは言うまでもない。この支配者層は苦しめる者、被压迫者だったのである。その中間の者（弱者を苦しめる民衆を言ふ）は、或る時には苦しめる者であり、或る時には苦しめられる者であった。この点に「压迫者と被压迫者の」の当時の魯迅的理解があり、それが中国改革の根本的障害は国民性の悪にあるという考え方とからまうて、その作品にお

いて理解の困難な複雑な陰影を現わしている一因ではないか、と思う。さらに一九一八年以後のこの時期魯迅の想定した中国改革の道筋において触れたように、「压迫者と被压迫者」の現在の問題は、進化論的解決の仕方の中に将来的に解消されてしまっていた。従つて魯迅（革命的知識人）と被压迫者の心の通い合い、運帯の問題は有効に提議されず、只兩者の「隔絶」へ「故郷」そして意識されたことを付け加えておきたい。

注1…「魯迅の『進化論』」（北岡正子『近代中国の思想と文学』所収 一九六七）

注2…細谷草子氏は「魯迅における民衆と改革者」へ集刊東洋学一六、一九六六、一〇三頁）で、「留学時代の文章には、明らかに多数者である民衆の愚かさを一段高い所から見おろして嘆いている姿勢が見られる」と指摘している。

注3…本山英雄氏は「『野草』的形成の論理ならびに方法について」へ東洋文化研究所紀要第三〇冊 一九六二）で、「彼は中国人の国粹主義、迷信、祖先崇拜、野蛮、折衷主義、二重思想、非個人的群衆的自大意識の類を次つぎと鋭利な批判の槍尖に挙げて行くが、しかしそれらに取つて替るべきものや改革の具体的プログラムは何ひとつ示さず、ただひとえ覚醒と改革の決心を迫るのみだった」と指摘している。ここで指摘された傾向は初期文学活動にもあてはまる。また「革命と文学」へ丸山昇『中国現代文学選集二、魯迅集』所収 一九六三）に同様の指摘が見られる。

注4…丸山昇『魯迅——その文学と革命』(一九六五)九一頁、細谷草子『魯迅における民衆と改革者』(集刊東洋学一六一)一〇三頁に、この指摘が見られる。

注5…『域外小説集』序(一九二〇)で魯迅は『域外小説集』の出版の意図を、「私達が日本に留学していた時、つかみ所のない一つの希望を持っていた。文芸は性情を移し変え、社会を作り変えることができるもの、と思つてゐたのだ。この見解から、自然と外国の新文学を紹介するといふ、この事に思いついた。(中略)当初の計画は、二冊を続けて印刷する資本を調達し、その本を売って元金を回収するのを待つて、その上で第三第四と印刷し、第五冊にまで行くといふものだった。このように継続していけば、壘も積れば山となるて、まずは各国の有名な作家の著作をほぼ紹介してしまふことができる。』と述べている。また周作人は、「豫才がもう一度東京へ行った目的は(中略)簡単に一言で言えば、中国を救おうとするならは文学から始めなくてはならない、というのである。彼の第一段の運動は雑誌を出すことであつた。(中略)雑誌を出すことは成功しなかつた。第二段の計画は翻訳をすることであつた。』(『瓜豆集』)關於魯迅之ニシとしてゐる。つまり雑誌『新生』を出す意図と『域外小説集』出版のそれとは、同じであつたとみることが出来る。

注6…先復した紹興では、都督王金癸が叔瑾殺害の謀議に關係した章介眉を投獄したが、処刑をためらつたため、反動派の盛り返しとともに章介眉は釈放された。魯迅が一九二二年一月南京に去つた後、八月章介眉は逆に王金

発追放に一役買ひ、王金発は結局解任され、軍隊を解散させられた。この都督王金発についての魯迅の見方は特徴的である。魯迅によれば「この与那个の二一」(一九二五)、彼はもともと大局を見、世論に耳を傾けける人物であつた。「中国の人々は自分を不安にさせ得るような非候を持つ人物に出会うと、従来二種類の方法を用いた。彼を圧迫するか、或いは彼を持ち上げるのである。」(同右)取り巻き連中が、彼を持ち上げて、以前の官吏のような存在に仕立てあげてしまつた、と言う。身近なこのような所で伝統的国民性の裏は、辛亥革命の礎石と内容を堀り崩した、と魯迅は考えたのであろう。

注7…とはいへ、絶望が突然そこで訪れたのではないであらう。この事は、絶望の深まりつゝ、あつた過程、つまり絶望が基底的なものとして定着していく過程の中で、それをかなり決定的に加速させることであつたらう。一九一三年には「芸術玩賞教育」「社会教育与趣味」「兒童之好奇心を翻記してゐるのだが、それにもかかわらずこの年七月の第二次革命の敗北によつて彼の絶望はますますしつかりと定着したのではないか、と思う。

注8…古典研究と魯迅の失意の切り離せないことの指摘は、日魯迅——その文學と革命——丸山昇 一二四頁、「魯迅の役人時代」下——山田敬三「野草」五号 七四頁)に見える。

注9…「日出了象牙之塔」后記(一九二五)において魯迅は次のように述べる。「中国の改革について言うならば、第一番目は勿論役に立たぬ物を一掃して、新しい生命を誕生させ得る機運を作り出すことである。五口運動

も本来はこの機運の始まりであつたのだらう。残念なことにそれを挫き折る者が多かつた。その事後の批判では中国人は大ていどつちつかずに、或いはでたらめにひとしきり述べた。外国人は当初むしろかなり意義のあるものと考えていた。しかし攻撃する者もいたのである、それによれば国民性と歴史とにまで思慮が及んでいない。だから価値がないのだと。これは中国の多数のむだらめな説と大おね同じである、というのは彼ら自身すべて改革者ではないからである。どうして改革でなかつただらうか。歴史は過去の事跡であり、国民性は将来に改造できるのであつて、改革者の目の中では過ぎ去つた物と目前の物とは、すべて無い物に等しいのである。本書にこのような意味の話があつた。五卅運動の評価について直後の魯迅自身の見解と変化してきている。直後の見解は「国民性と歴史とにまで思慮が及んでいない、だから価値はない」という評語にむしろ近かつたのである。その見解が非改革者の立場からの批判であつたという反省のことに一九二五年の段階では五卅運動を再評価している。

注10…茅盾は「讀日呐喊」(日文学)所載一九二三)で「当時私がこのいぶかしげな狂人日記に對してどのような感想を持つたのか、既に今は余り覚えがない。大てい當時も必ずしも何らかはつきりとした印象を持つたのではなかつたのだらう。只一種痛切な刺激を受けたことを覚えていただけである。丁度長く暗黒の中にいた人々が突然眩しい陽の光を見たようなものである。しとしてゐる。」

注11…「進化論とニ―ナエ」(尾二兼英)中国現代文学選集二、魯迅集四一九六

注は… 例えは弱者について「よるべない弱く小さな者」(原文 小弱孤露者)はなかつた。また北岡正子氏は「摩羅詩力説」(材源考ノート)「そのニ」(「日野草」一〇号)で「魯迅が「カイン」を紹介して、権力を以て人に君臨してはばからぬ神を論難するのは、以上の二つの要素のうち、前者に則つたものである。後者の「人間生活の無限の不幸に就いての表現」である要素は「摩羅詩力説」の差し当つての主題ではなかつた為か、特に取り上げていない。」「(五五頁)と指摘している。これには魯迅の初期文學活動の傾向を示唆する所があると思われる。

注は… 「幸福」(「現代小説叢書」所収)の後書で魯迅は「事實の二から論じても、可いゆる幸福な者が一生でたらめを行なつてゐるばかりでなく、不幸な者でさえも、一方で各々が彼ら自身の生涯をだめにしてゐる」とを描き尽している。サーシヤは美貌であつた時には、肉体を人の娯樂に使した。鼻を腐らせるに及んで、肉体によつて人に残酷な娯樂を供する。しかしかできず、またやはり使しなければならなかつた。しかし通りがかりの人も決して幸福な者ではなく、彼を娯樂の種とする人が他にいるのである。と述べている。ここには、被压迫者へ苦しめられる者」と「压迫者へ苦しめる者」の連鎖のように連なる関係が現われている。娼婦サーシヤに對しては「压迫者へ苦しめる者」であつた通りがかりの使用人は工場では被压迫者へ苦しめられる者」であつたのだらう。

注14…『新青年』八巻五号の「文学上の俄国与中国」(周作人 一九二〇年講
演)は後に『小説月報』の『俄国文学研究』号に転載された。その中で周
作人は近代ロシア文学の歴史を紹介し、その特徴を述べた中で、次のよう
に語っている。「ロシア人の過ごした生活は困窮したものだ。だから
文学には民謡から詩文に至るまで、一種の暗い悲哀の調べを含んでい
る。しかしこの結果は、決して彼らに憎悪、怨み、或いは屈服の心を養わす、
むしろ人類に対しての愛と同情とを養ったのである。(中略)ロシアの文
学者は皆、あれらの「侮辱され、そして攫い、痛めつけられた人々に愛情を抱い
ている。なぜならば、アンドレーエフの言うように、「私達は皆同じように
不幸だからである。」

注15…尾上兼二氏は「進化論とニールチェ」(前掲)で一九二五年までの魯迅自
身の思想的遍歴を簡潔に表現した。「人道主義と個人主義の二つの思想の起
伏消長」についての解釈を次のように述べる。「いっぽう魯迅が人道主義
とよんでいるのは、将来についての希望を否定できないという一種の気の
弱さである。「自分が苦しんできた寂寞を、私の舌いころと同じように甘
い夢を見ている青年に伝染させたくない」(『呐喊』自序)と「愛
とよぶのが、より正確である。しかしながら、それはむしろ弱小民族と
の互助の提唱や、中国旧社会における差別された弱者、犠牲者に対する同
情共感を表現させた思想、立場と言った方がよくはないだろうか」と私は
思う。

注16…丸山昇氏は「現代小説」(『中国文化叢書』四 文学概論)に所収 一九

六七)で、「魯迅の場合、民衆の持つエネルギーが解放されることは、救国と矛盾しないばかりか、まさにそれを可能にし、強化するものであるが、梁の場合、所詮民衆は中国へ近代化の主体ではなく、彼ら士大夫出身の先覚者が切り開く道に従い、導かれるべき客体であった。L(二六五頁)「言、換えれば、梁は民衆の人的エネルギーが内部から解放され発輝される可能性も必要性も、真の意味では考えていないのである。L(二六六頁)とする。しかしながら、私には、魯迅が「民衆の人的エネルギーが内部から解放され発輝される可能性も必要性も」認めたとて、なお民衆を導かれるべき客体、受動的立場に置いている、と思われるのである。